

山と博物館

第51巻 第5号 2006年5月25日

市立大町山岳博物館



巣作りをしているサンショウウクイのツガイ

撮影 長澤修介

平成十八年五月十四日に鷹狩山で開催された「小鳥の声を聞く会」（市立大町山岳博物館主催、今回で二回を数える）では、三八種の野鳥の鳴き声や姿を観察でき、サンショウウクイ、エナガ、メジロ、ホオジロと計四種の野鳥の巣を確認することができました。

サンショウウクイ（サンショウウクイ科）は、冬は東南アジア等にて、春に日本に渡ってきて繁殖し、秋になるとまた暖かい国に帰っていく夏鳥です。長野県のレッドデータブックでは、オオタカやライチヨウと並んで絶滅危惧II類（VU）「長野県内において絶滅の危険が増大している種」に位置付けられています。

大町市では比較的目にする機会が多く、鷹狩山でも毎年観察されています。

また、サンショウウクイという名前は、「サンショウ小粒でもピリリと辛い」ということわざがありますが、ピリリ、ピリリ…という鳴き声からがつけられたと言われています。

サンショウウクイの巣場所は、車道に面した高木の枝が分岐した所に作られていました。
巣は木の枝の色とそっくりで、人間の目からはどこに巣があるのかわからないくらいです。巣の構造は、お椀のような形で、一般にイメージする鳥の巣（いわゆる木の枝などを組み合わせ作られた皿状の巣）とはかなり異なつており、巣の内部は細い草の茎や根などで出来ていますが、巣の外部はウメノキゴケをクモの糸で貼り付けて造られています。

巣材の色が保護色となり、木のこぶの様にしか見えないので。

サンショウウクイ
清 水 博 文

二ホンカモシカを題材とした 教育プログラムの開発に取り組む

宮野典夫

り込んだ。
イベントは二ホンカモシカを調査すること

の模擬体験などを通して、二ホンカモシカの生態やそれを取り巻く自然に興味を持つてもらうことを目的とした。

はじめに
東京コミュニケーションアート専門学校の学生を中心とした北アルプス森のカモシカ樂舎というグループが、二〇〇二年から大町市平高瀬入の山林で二ホンカモシカを観察し、そこから導き出されたデータをもとに、子供向けの学習プログラムを開発し、実践している。

これらを進めるにあたって、二ホンカモシカを觀察し実際に見たものや体感したものの大目に考えて、北アルプス山麓の二ホンカモシカならではの学習プログラムを創作することを考えた。筆者は彼らの調査やイベントのいくつかに同行させてもらったので、ここにその一部を紹介したい。

調査・イベントの場所

調査の範囲は高瀬川支流の渋沢を中心とした約三〇〇ヘクタールの民有林である。北および東向きの斜面が多い二次林で、カラマツ、ミズナラなどの樹種で構成されている山林である。

イベントの実施場所は主に林道あるいは林道の脇の尾根、沢などで行なった。



①足跡：爪の向いて進んだ方向がわかる。この場合は上が進行方向
②食痕：芽に毛が付着
③フン
④角とぎ跡
⑤休息場：座休息と立休息がある。写真は座り休息

二〇〇二～二〇〇三年の活動
調査は、主に足跡、食痕、フン、角とぎ跡、休息場を地図上にプロットして、ツガイで生

かしたことなどから、行動域の確定が難しかった。しかしA区域では親子、B区域では個体、C区域では親子と単独行動をとる一

活していることを想定したうえで行動域を推定した。
実際に観察できた生活痕と推定した行動域を示した（図1）が、連続して足跡が追えなかつたことなどから、行動域の確定が難しかった。しかしA区域では親子、B区域では個体、C区域では親子と単独行動をとる一

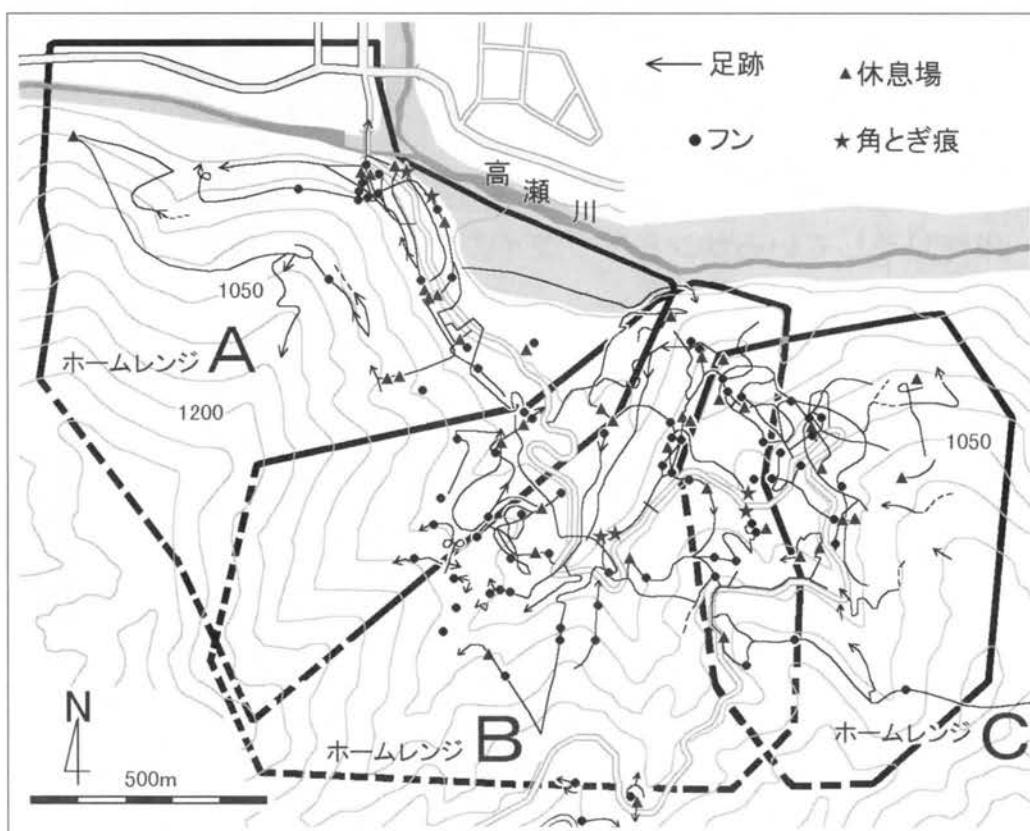


図1 2002～2003年の生活痕と推定した行動域

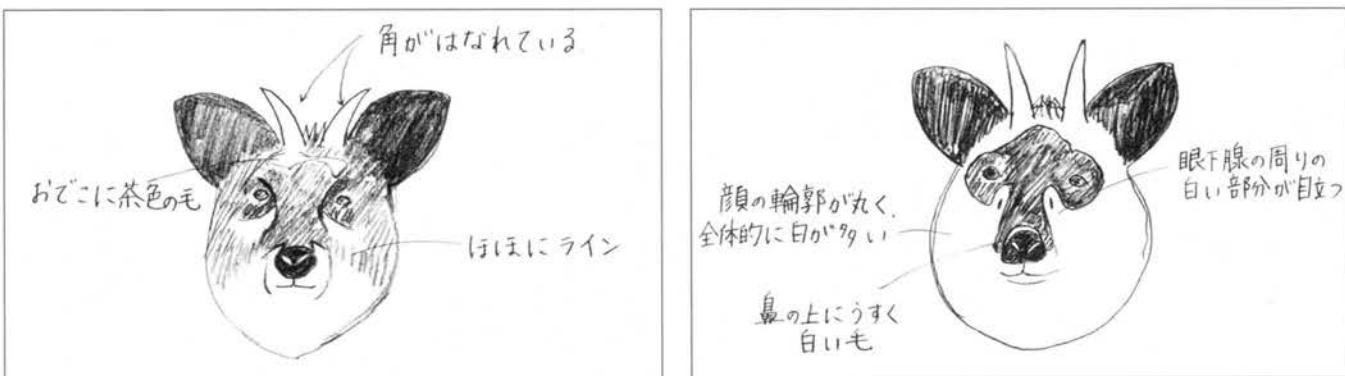


図2 個体識別カードの一例

個体が確認できた。

イベントは調査模擬体験型とし、雪面上で実際の足跡を追跡しながら、角とぎ跡や休息場の説明などに発展させた。また、ニホンカモシカの生態を楽しく理解するための工夫として独自に製作したカルタ（カモシかるたと称して実施）と、生態をまとめた紙芝居（カモシばいと称して実施）も好評であった。

二〇〇三～二〇〇四年の活動

ニホンカモシカの個体識別をすることを重点に直接観察の機会を多く持ち、写真撮影にも心がけた。個体識別の手段としての写真是スタッフが共通認識をする上で、非常に有効であった。また、スタッフ以外の人にも個体差がわかるようなカードの作成をおこない、観察時やイベント時に活用した。調査区域内では九個体の個体識別が可能になつた。

イベントは調査模擬体験型とした。イベントの開催エリアに適している区域内の五個体を対象にして、実際にニホンカモシカの観察ができるポイントを設定し、識別カードを参考にしながらの個体識別を実施した。

実際にニホンカモシカに遭遇できたグループと会えなかつたグループが生じたが、その後のイベントでニホンカモシカに変装したスタッフが、ニホンカモシカになりきつて様々な行動を示し、実際にニホンカモシカを見ることのできなかつた子供へのフォローもできていた。イベントの最後に自分がニホンカモシカのお面を作り、一頭づつ違うことの理解を実感できる工夫もあつた。

二〇〇四～二〇〇五年の活動

約二キロメートルの尾根と約一・五キロメートルの沢を対象に、二〇〇四年の二月と三月に調査

した結果、休息場は尾根に多く見られ、沢ではみつけることができなかつた。休息する場合には、見晴らしが良くて背後に岩や大きな木などがあるところなど落ち着いた場所を好みので、沢より尾根を選ぶと思われる。ニホンカモシカの餌となる植物は、沢筋の方が豊かなのが一般的であるので、食痕は沢に多く、足跡もあちこち歩き回った痕跡があつた。それに比べ尾根筋は昇り降りの足跡より尾根を横切る方が多く見られた。

イベントは尾根と沢にみたてた場所にあらかじめコースを作り、尾根での休息、沢での食事といった場面を想定して、各場面で解説しながらコース上を歩く形式で行なつた。

二〇〇五～二〇〇六年の活動

ニホンカモシカの姿を目視し、その行動を観察し記録をとつた。二〇〇六年三月一五日には七時四〇分から一八時五分までの一時間三〇分余りの連続追跡をすることができた。現在そのデータを整理しているところである。これらの記録をもとにしてニホンカモシカの生活を基調とした、絵本の作成に取り組んでいる。

結びとして

学校での発表やレポート提出の関係から、テーマの設定、生息現地での観察や調査の期間設定、イベント等の企画と実施といった流れが、実質二〇ヶ月という短い期間で行なわなければならぬ制約があり、充分な調査時間がないことから、詳細なデータ蓄積ができなくて感覚的

な立場から「多い」「少ない」のような表現になってしまわざるを得ないところがあつた。しかしながら、ニホンカモシカを見たこともなかった学生が、デスクワークとフィールドワークを繰り返すことで、ニホンカモシカとその環境を学び、実体験をもとにしたブログの企画と実施を成し遂げる姿には賞賛の声をあげたい。

この活動が続き、データの蓄積とプログラムの改良を重ね、より洗練されたものへと発展し、広く活用できるものになることを願っている。

（市立大町山岳博物館 副館長）



図3 沢と尾根の生活痕の違い

